

## 三浦半島、油壺湾内で採集されたウシエビの稚エビ

山田 和彦・池田 等

Kazuhiko Yamada and Hitoshi Ikeda: Record of juvenile big tiger shrimp, *Penaeus monodon* in Aburatsubo Bay, Miura Peninsula, central Japan.

### はじめに

ウシエビ *Penaeus monodon* は、インド・西太平洋の熱帯・亜熱帯海域に広く分布する大型のクルマエビ属のエビである(林, 1981, 1986)。東南アジアなどでは養殖がさかんに行われ、ブラックタイガーの名で食用に供されている。本種は、着底期以降の一時期にマングローブなどの浅海汽水域にすみ、成長に伴って沿岸深所に移る(Takeda, 1988)。国内では房総半島以南に分布するとされるが(林, 1986)、その記録は少ない。

2001年9月14日、ウシエビと思われる稚エビが油壺湾内で採集された(図1)。本種は、相模湾や三崎で採集された記録はある(Kubo, 1949; 田村, 1999)が、詳細な採集報告はない。ここでは、ウシエビ稚エビの形態と、採集時に観察された生態について報告し、併せて相模湾付近における熱帯性の甲殻類の記録をまとめた。

### 記載標本

Class Malacostraca 軟甲綱

Order Decapoda 十脚目

Family Penaeidae クルマエビ科

*Penaeus monodon* ウシエビ

葉山しおさい博物館甲殻類標本HSM-Crm-0087。本個体は、採集時には全長約5cmであった。しかし、海中垂下式の籠に入れておいた20日間の間に、2回脱皮を行ったため、ここでは脱皮後の測定結果を示す。

全長79.5mm、体長72.6mm、頭胸甲長18.8mm、体幅9.5mm。額角は脱皮時に破損したのか、先端部分が欠損している。額角上縁の歯は7本、下縁の歯は2本。額角側溝は不明瞭。体色は黒緑褐色で、背面は黄褐色。体側と背面の色の境界は、複雑に入り組む。第一触角の鞭状部はクリーム色と焦茶色の縞模様がある。

### 採集時の状況

2001年9月11日に台風が三浦半島付近を通過した。その2日後、油壺湾奥にあるヨットハーバーの浮き桟橋に木の枝が流れ着いた。この枝を取り除こうとしたところ、枝の一部に見えたものが離れ、また自力で元の位置にもどった。よく見ると暗色のクルマエビに似たエビで、全長は約5cmであった。

通常、クルマエビ類の稚エビは砂底を好み、日中は砂に潜っていることが多い。しかし、ウシエビの稚エビは砂にあまり潜らない。飼育実験の観察によると、全長5cmの稚エビは、水槽内に設置された小枝に頭を下にしてとまっていた。暗色の細い体は、一見すると小枝と区別するのが困難であった(橋高私信)。本種の生息地の一つであるフィリピンでは、マングローブの根に、稚エビが付いているのが観察されている(橋高私信)。これらの行動は、本種の稚エビのマングローブ域における擬態と思われる、本報告での観察例とも一致する。

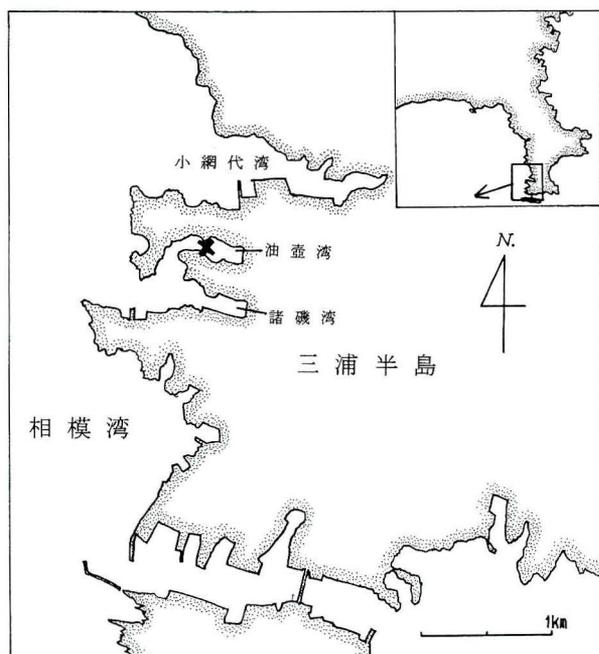


図1. 採集地.

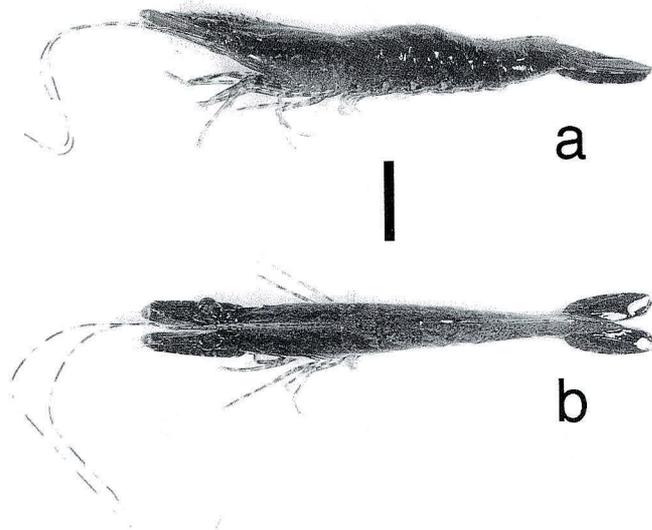


図2. 油壺湾で採集されたウシエビ *Penaeus monodon* HSM-Crm-0087. TL79.5mm. a: 側面, b: 背面.

なお1個体が採集された3日後(9月16日ごろ), もう1個体が採集されたが, 標本は保管できなかった。

#### 相模湾での熱帯性甲殻類の記録

これまでに相模湾から熱帯性の甲殻類として, ツノメガニ *Ocypode ceratophthalma* (渡部, 1976), ハクセンシオマネキ *Uca lactea* (工藤・山田, 2000), ニシキエビ *Panulirus ornatus* (池田, 1992) などの記録がある。これらは, 幼生が黒潮にのって相模湾に到達し成長はするが, 冬期の低温下で死亡するため繁殖に至らない, すなわち死滅回遊の一例である。ウシエビの分布記録の北限は房総半島で, 外房に面した大原港では, 個体数は少ないが本種の稚エビが採集されている (Motoh & Kojima, 1986)。にもかかわらず, 筆者らが1963年から調査を行っている相模湾と東京湾のクルマエビ漁(底刺網, 手操網)で, ウシエビの成体は採集されていないことから, 死滅回遊と考えられる。

死滅回遊に関しては, 魚類の記録は多くみられる。しかし, 死滅回遊魚の出現メカニズムを解明するまでには至っていない。また, 近年, 飼育していた外国産の魚類を放流したと思われる例がある (瀬能, 2001)。甲殻類に関しても, 生きたものがアメリカ東岸から空輸されているアメリカウミザリガニ *Homarus americanus* の記録があり (渡部, 1993), 三浦半島江奈湾で記録されたハクセンシオマネキは, 人為的な放流も考えられる (工藤・山田, 2000)。今回のウシエビの記録は, 本種の稚エビが国内で観賞用または養殖用として飼育されることはないので, 自然分布と思われる。

ウシエビの幼生期間はおよそ15日間で, その後, 沿岸の汽水域に戻り着底する (Takeda, 1988)。他のクルマエビ属の場合, 浮遊生活を送る幼生期間が終わると, すぐに着底するため, 浮遊期間を特定することができる。しかし, ウシエビの場合, 幼生期間が過ぎても木の枝などに掴まったまま漂流する可能性があるため, 浮遊期間を特定するのが困難である。静岡県浜名湖では, 本種が漁獲対象となっており, 再生産が行われていると思われる。今回採集された個体を含め, 相模湾付近で採集されるウシエビの起源が, 産卵場としては最も近い浜名湖なのか, それよりさらに南にあるのかどうかを明らかにするために, より多くの標本を収集し, 海況や採集情報を含め, 分析する必要がある。

#### 謝辞

本報告を作成するに当たり, 貴重な標本を寄贈下さり, 採集状況について知らせてくださった日高芳子氏, ウシエビの生態と未発表の飼育記録の公表を承諾くださった根室水産研究所所長橋高二郎博士, 種々ご教示いただいた千田哲資博士, 京都府栽培漁業センターの本尾 洋博士に深く感謝する。

#### 文献

- 林 健一, 1981. 日本産エビ類の分類と生態(1)クルマエビ科 - 1. 海洋と生物, (16): 368-371.
- 林 健一, 1986. ウシエビ. pp. 72-73. 日本陸棚周辺の十脚甲殻類. 日本水産資源保護協会, 東京.
- 池田 等, 1992. 相模湾初記録のニシキエビ. *Cancer*, (2): 21.
- Kubo I., 1949. Studies on Penaeids of Japanese and its adjacent waters. *Jour. Tokyo Coll. Fish.*, 36 (1).
- 工藤孝浩・山田陽治, 2000. 三浦半島, 江奈湾干潟におけるハクセンシオマネキの出現. *神奈川自然誌資料*, (21): 69-72.
- Motoho, H. and J. Kojima, 1984. On postlarvae of the genus *Penaeus* apperring inside fishing port of Ohara, Chiba Prefecture, Japan. *Researches on Crustacea*, (15): 37-43.
- 瀬能 宏, 2001. 日本に人為拡散したキンチャクダイ科魚類2種について. *I. O. P. Diving News*, 12 (10): 2-5.
- Takeda, M., 1988. Prawns of Southeast Asia. pp. 169-177. *Fisheries in Japan, Prawns of Asia*. Japan Marine Products Photo Materials Association, Tokyo.
- 田村俊一, 1999. 逗子市田越川で採集されたチチュウカイミドリガニ. *神奈川自然誌資料*, (20): 81-84.
- 渡部 孟, 1976. 相模湾産 *Ocypode* 属について. *甲殻類の研究*, (7): 170-177.
- 渡部 元, 1993. 相模湾から得られたアメリカウミザリガニ. *Cancer*, (3): 3-4.

(山田: 相模湾海洋生物研究会,

池田: 葉山しおさい博物館)